

## 指揮官と老女：「バーバラ・フリーチャー」を読む

著者	澤入 要仁
雑誌名	国際文化研究科論集
号	21
ページ	83-97
発行年	2013-12-20
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/57000">http://hdl.handle.net/10097/57000</a>

# 指揮官と老女

—「バーバラ・フリーチャー」を読む—

澤 入 要 仁

## はじめに

南北戦争（1861–65）のさなか、メリーランド州西部で起こった（とされる）事件をうたった詩を論じたい。詩人ジョン・グリーンリーフ・ホイットティアの「バーバラ・フリーチャー」（1863）である。これは、南軍の名将ストーンウォール・ジャクソンひきいる部隊がメリーランド州フレデリックを通過したとき、北部連邦の旗である星条旗をふってジャクソンを挑発したという老嬢バーバラ・フリーチャーの物語だ。

先行研究の紹介からはじめよう。1976年にホイットティア研究書誌を編んだフォン・フランクがいうように、「バーバラ・フリーチャー」は「ホイットティアのもっとも言及される詩」である。しかし、同時にそれは「悲しくも奇妙な」議論ばかりだった。というのは、そのほとんどの議論が「歴史的正確性の問題」に関するものだったからである。その文学的あるいは文化的研究は皆無とっていい状況だった<sup>1</sup>。

じっさい MLA の書誌をひもとくと、二編の先行研究しか掲載されていない。「もっとも言及される詩」であるにもかかわらず、その学術的研究がわずか二編である。しかも、いずれも文学研究というより、歴史研究というべき論文だ。ひとつは、クイン姉弟の論文「バーバラ・フリーチャー」（1942）であり、もうひとつは、ラルフ・スチュワートの論文「『バーバラ・フリーチャー』と南北戦争」（2003）である<sup>2</sup>。

前者クイン姉弟の論文は、ホイットティアがうたった事件が本当にあったのかどうかをあらためて検証した研究だ。関係者の子孫が残した手記などを含めた姉弟の調査は、きわめて網羅的かつ徹底的である。21世紀の現在になってはもはや再現不可能であって、この問題についてこれ以上の進展は期待できないだろう。姉弟の結論は、このような事件が起こりうる状況はあった、しかし起こったという確証はない、というものだった。この一見まったく面白味のない結論が、バーバラ・フリーチャー事件の真贋の結論といわざるをえない。後世の研究者は、その結論を謙虚に受け入れ、歴史的眞偽についてはこれ以上拘泥しない勇気が求められる。

昨年、『ワシントン・ポスト』紙がバーバラ・フリーチャーについての記事を掲載したが、それもやはりこの伝説の眞贋についての記事だった。「南北戦争の伝説的ヒロインの非正統的名声」と題されたその記事は、この事件を起こした女性はフリーチャーでなく、メアリー・クアントレルという30代の女性だった、と述べている。どうして今になってふたたびクアントレル説が浮上したのかわからない。すでに70年前にクイン姉弟がクアントレル説について精査し、クアントレルが事件を起こしたという証拠もない、と判断している。その結論を覆すためには、新しい画期的な資料が必要なはずだ<sup>3</sup>。

MLA の書誌にあげられた二編の先行研究にもどらう。ふたつめの研究は、詩「バーバラ・フリーチャー」が、開戦から執筆時（1863）にいたる南北戦争の趨勢と密接に絡みあっている、と説いたラルフ・スチュワートの研究である。スチュワートによると、本作品は、開戦以来、劣勢を強い

られてきた北部がメリーランドを侵攻されたものの、アンティータムの戦いを経て優勢に転じ、勝利をほぼ手中に収めるようになる、その戦史の縮図になっている、という。この詩そのものが、単なる 1862 年 9 月 10 日に起こった（とされる）事件をうたったのではなく、南北戦争全体の象徴となっているというのである。これは、作品の全体的意義を指摘していて、きわめて興味ぶかい。

ところで、詩「バーバラ・フリーチャー」に関する研究がこれら二編しかないというのはたしかに少ない。この詩が人口に膾炙していたことを考えるとなおさらそう思われる。けれども、他のいわゆる炉辺詩人研究と比べれば、ホイットィア研究そのものは驚くほど充実していることも事実である。たとえば、1937 年には、浩瀚なホイットィア研究書誌が出版された。692 頁からなるキャリア編の『ジョン・グリーンリーフ・ホイットィア書誌』だ<sup>4</sup>。これは、マイケル・ウィンシップがのち *BAL* 第 9 巻のホイットィアの項を編集するとき「おおいに依拠」せざるをえなかった、すぐれた書誌である<sup>5</sup>。この書誌を補う書誌ものに編纂された。フォン・フランク編の『ホイットィア——注釈付き包括的書誌』（1976）である<sup>6</sup>。このような基礎的研究は、他の炉辺詩人研究にはほとんどみられない。さらに 1985 年になって、標準的伝記も出版された。全 636 頁からなるウッドウェルによる詳伝『ジョン・グリーンリーフ・ホイットィア——伝記』である<sup>7</sup>。このような決定版の伝記も他の炉辺詩人研究で刊行されたことはなかった。

ホイットィア研究が 20 世紀の間、かくも着実に続けられてきたのは、ホイットィアが他の炉辺詩人とちがって、政治的な詩人であったこと、そして同時に地方的詩人であったこと、に由来すると思われる。奴隷制廃止運動という政治的運動に係わっていたため、単なる文藝上の存在ではなく、政治史や社会史と絡みあった存在とみなされてきたのである。同じく、ニューイングランドの文化や自然をうたってきたため、郷土の生んだ詩人として郷土に密着した研究が続けられてきたのである。対照的に、炉辺詩人の代表というべきロングフェローは、政治に深く足を踏み入れることもなかったし、その作品もユニヴァーサルであった。そのため、20 世紀の研究が進まなかったと思われる。

「バーバラ・フリーチャー」の先行研究に戻ろう。本稿は、この二研究から多くを学んでいる。しかしいずれの研究も、作品のテキストそのものを細かく分析したものではない。前者はみずから認めるように、「この詩の文学的価値に関心が無い」し、後者は、作品の内容を南北戦争史全体と照らしあわせた研究である<sup>8</sup>。いずれも歴史研究の範疇に属する論考だ。

そこで、本稿では本作品のテキストを細かく考察することによって、本作品の特徴を明らかにしたい。以下に示すとおり、「バーバラ・フリーチャー」は、単調になりすぎぬよう巧みに注意しながら戦争詩らしいリズムをたもっていた。それは、気高く垂直にのびるフリーチャーの行為と水平に地を移動する南軍を対比させ、きわめてダイナミックにうたわれている。しかも、これまでの南北両軍の経緯だけでなく、戦時中の作品でありながら、和解や鎮魂という終戦後のアメリカが向かうべき世界をも示唆していた。詩「バーバラ・フリーチャー」は、文学的に議論する価値が大いにある作品といえるだろう。

## 南北戦争と境界州

詩「バーバラ・フリーチャー」を論じるためには、まずその歴史的背景を明らかにしなければならない。

南北戦争の直前、アメリカ合衆国には三十四の州と八の準州・領があった<sup>9</sup>。けれどもエイブラハム・リンカンが大統領に選ばれるや、サウス・カロライナ州をはじめとして七州が次々と合

衆国連邦を脱退、アメリカ連合国（南部連合）を結成する。さらにサムター要塞への攻撃によって開戦の火蓋が切られると、今度はヴァージニア州をはじめとした四州も離脱し、同じく連合国に加わった。こうして南北戦争は、南部の連合十一州と北部の連邦二十三州とのあいだで戦われることになった<sup>10</sup>。

たしかに南北戦争最大の要因は奴隷制問題であった。19世紀前半のアメリカは奴隷制問題に明け暮れていた。たとえば1807年、新しい奴隷の輸入を禁じた奴隷輸入禁止法が成立すると、南部は憤慨、北部はその不徹底さを攻撃した。1820年には、新しい領土における奴隷制の可否をめぐるミズーリ協定が定められ、妥協点が模索された。けれども、1854年には同協定を無効にして、カンザス、ミズーリ両準州の奴隷制の可否を住民の多数意志に委ねるとしたカンザス・ネブラスカ法が制定され、「流血のカンザス」と呼ばれる一連の衝突を招いた。このように奴隷制問題が南北間の大きな火種であったことは事実である。

しかし奴隷制の撤廃・維持がけっして戦争の大義そのものだったのではない。このことには注意する必要がある。南北戦争の大義は、北部にとっては連邦の回復、南部にとっては連邦からの独立であり、そうする自由であった。

じっさい、北部には奴隷州も含まれていた。デラウェア、ケンタッキー、メリーランド、ミズーリの四州である。これらは（デラウェアをのぞいて）南北の境界線に位置していたため、境界州と呼ばれ、奴隷州でありながら連邦から離脱せず、北部の州として参戦した<sup>11</sup>。そのため、これらの州には1863年の奴隷解放宣言の適用も免除されていた。メリーランドとミズーリは、戦中の1864年と1865年にそれぞれみずから奴隷制を廃止したものの、デラウェアとケンタッキーは、戦後の合衆国憲法修正第十三条（1865）によって奴隷制が廃止されるまで、奴隷制が存続していた。

なぜ境界州は連邦を離脱しなかったのか。それは、これら四州が奴隷州でありながら、奴隷制に依存した社会ではなかったからである。たとえば、深南部で成功していた、奴隷労働力にもとづく高収益の綿花プランテーションが発達していなかった。そのため境界州には奴隷の数も少なかった。脱退した十一州の奴隷は全人口の39%であったのに対し、境界州のそれは14%にすぎない。デラウェアにいたっては、奴隷人口はわずか1.6%である。この数字がいかに小さいかは、サウス・カロライナ州の奴隷が全人口の57%を占めていたことを思いおこせばいい<sup>12</sup>。

北部諸州と同じく、境界州では都市が発達していた。境界州の三大都市はメリーランド州ボルティモア（人口全米第四位）、ミズーリ州セント・ルイス（同八位）、ケンタッキー州ルイズヴィル（同十二位）だったが、その人口を合わせると44.1万人にのぼる。それに対して、南部連合の三大都市、すなわちルイジアナ州ニューオーリンズ（人口全米第六位）、サウス・カロライナ州チャールストン（同二十二位）、ヴァージニア州リッチモンド（同二十五位）は、その全米順位からも明らかのように、境界州の大都市よりも規模が小さかった。人口は合わせて24.7万人にすぎない<sup>13</sup>。

これらの都市住民は農業以外の産業に関わっていた。ということは都市人口の多寡が、そのまま工業生産量に反映する。じじつ境界州の工業生産は、南部連合のその80%にも相当していた。デラウェアのような小さな州をふくむ、わずか四の州で十一の州の80%を生産していたのである<sup>14</sup>。そのため境界州は、南部と州境を接していたものの、同様に産業化が進んでいた北部といっそう強い経済的関係をもっていた。南部と州境を接していないデラウェアはなおさらそうだった。

ただしこれらの境界州が簡単に連邦離脱を拒んでいたわけではない。デラウェアをのぞき、各州の内部には南部に同情的なグループも多かったからである。たとえばケンタッキー州では、1861年11月18日、親南部の一派が南部連合ケンタッキー政府を立ち上げていた。同年12月10

日、この政府は南部連合に組み入れられてさえいる。実質上の大きな貢献があったとはいえないが、その存在は（ミズーリ州の同様の一派とともに）南部連合の軍旗に明示された<sup>15</sup>。ケンタッキー州にはオハイオ川をはじめ、その支流のカンバーランド川、テネシー川が流れていて、戦略上も重要な土地であったため、リンカンはこの不安定な境界州の離脱を防ぐことに腐心しなければならなかった。

同様に戦略上重要だったのがメリーランド州だった。メリーランドは首都ワシントンの三方を取り囲んでいた。（残りの一方は南部連合のヴァージニアと接していた。）しかも、ワシントンに通ずる電信線や鉄道がメリーランドを通過していた。つまり、ワシントンとメリーランドはほとんど一心同体だった。もしメリーランドが寝返って連邦を離脱することになれば、北部はもはやワシントンを放棄せざるをえなかった。そのようなことになれば、連合国政府がアメリカを代表する政府にみられてしまう。

メリーランドには南部シンパの勢力も強かった。1860年11月の大統領選挙一般投票では、共和党のリンカンではなく、南部の民主党から出馬したジョン・ブリキンリッジを選出しているくらいだ。州の南部や沿岸部にはタバコのプランテーションが発達し、ヴァージニアとのつながりも強かった。南部に同情する群衆は、開戦一週間後、ワシントンへ向かう北軍の一団をボルティモアで襲撃していた。さらに彼らはワシントンに通じる橋や電信線も破壊していた。

しかしメリーランドの州西部や州北部は、北部州に与していた。その地域は穀物生産が主たる産業だったので北部との取引が多かったからである。19世紀になって州西部に急増したドイツ系移民たちも、奴隷制に反対だった。このようにメリーランドもまさに境界的な状況にあったのである。

## 1862年初秋のメリーランド州

「バーバラ・フリーチャー」に関わる史実へ焦点をしぼろう。

1862年8月28日から30日にかけて、ヴァージニア州北東部で第二次ブル・ランの戦いがあった。ジョン・ポウプ少将ひきいる7万の北軍と、ロバート・E・リー将軍が指揮する5.6万の南軍の大衝突である。そのとき南軍は、敵の右側面に回った“ストーンウォール”・ジャクソン（本名トマス・ジョナサン・ジャクソン）少将の機動力によって、北軍をワシントンまで撤退させることができた。南軍の大勝だった。

南軍は北上する。9月5日、州境をなすポトマック河をわたり、凱歌をあげながらメリーランドへ上陸。すでに述べたように、メリーランドは奴隷州でありながら境界州として北に属する州だ。このメリーランドを寝返らせ、ぜひ味方にしたい。それが南軍の大きなねらいだった。南軍は6日から、メリーランド州フレデリックの南に数日、野営する。しかし市民の反応は予想に反して冷淡そのものだった。

南軍は、10日、連邦の武器庫があり交通の要地でもあるハーパーズ・フェリーを奪おうと、野営地を出発する。まずジャクソンの部隊が、ウェスト・ヴァージニアのマーティンズバーグ経由で向かうため、早朝3時に野営地を出発し、フレデリックの町を通過した。続けて、リーも部隊を率いてハーパーズ・フェリーを目指してフレデリックを西進した。

一方、北軍のジョージ・マクレラン少将は、リーを追跡せんと9月4日、8.7万の兵を三団に分けてワシントンを出発していた。そして13日、三団はフレデリックで合流する。三日前まで近くで南軍が野営していた町だ。北軍は、これまた予想に反して、市民から熱狂的な歓迎を受け

た。なお、この北軍の中には、のちの合衆国大統領ふたりが含まれていた。19代大統領になるラザフォード・B・ヘイズ中佐と25代大統領になるウィリアム・B・マッキンリー兵站軍曹である。

15日、フレデリックに集まっていた北軍の多くがアンティータムへ向かった。リーの軍団を襲うためである。そのころ、南軍のジャクソン少将は、ハーパーズ・フェリーを包囲し、その北軍守備隊1.2万人をいとも容易に降伏させていた。ジャクソンは喜びにひたる間もなく、リーに加勢するため、アンティータムへ兵を進める。

そしていよいよ17日、アンティータムに砲声が響いた。8.7万の北軍と4.5万の南軍の死闘である。わずか一日の交戦で両軍合わせて死者6300から6500人、負傷者1.5万人を出した。これは一日の戦闘の死傷者としてはアメリカ史上最大の死傷者である。2001年のいわゆる同時多発テロによる一日の死者より二倍以上多い<sup>16</sup>。

この戦いは、南北両軍が大きな被害を受け、一方が壊滅的な打撃を受けたわけではなかったもので、雌雄を決した戦いとはいえない。しかし南軍がポトマック川を渡ってヴァージニアへ撤退したことから、実質的には北軍の大勝だった。第一次ブル・ランの戦いから続いていた南軍の快進撃は終わったのである。フレデリックスバーグの戦い（同年12月）のような、南軍が快勝する戦闘もこれから起こるが、南軍の野望はここに断たれたといい。じっさい北部の連邦政府は勢いづき、リンカンが同月22日、奴隷解放宣言予備宣言を発表した。（本宣言は翌年1月1日。）これは、メリーランド州のアンティータムの戦いで実質的勝利を収めた以上、奴隷解放を宣言しても、もはや境界州が立腹して寝返るようなことがないと判断したからだった。

### 「バーバラ・フリーチャー」と詩人ホイットニア

以上が史実である。ホイットニアはこの史実を背景にして、詩「バーバラ・フリーチャー」を書いた。それは、史書には記されていないある事件をうたっていた。上述の南軍の英雄、ストーンウォール・ジャクソン少将が9月10日、ハーパーズ・フェリーへ向かうためフレデリックの町を通過したときに起こった、とされる事件である<sup>17</sup>。

ホイットニアによれば、ジャクソン少将ひきいる南軍部隊がフレデリックの町を通ったとき、90歳の老女バーバラ・フリーチャーが屋根裏部屋の窓から星条旗（北部連邦の旗）をふったという。ジャクソンの命令によって部隊が発砲すると、老女は「撃たねばならぬのなら撃て、この老いた白髪頭を／だがお前の祖国の旗を撃つなかれ」といった。それを聞いてジャクソンは、発砲を制止し、そのまま進軍を続けたという<sup>18</sup>。

詩「バーバラ・フリーチャー」は1863年9月、雑誌『アトランティック・マンスリー』の同年10月号に発表された<sup>19</sup>。事件が起こったとされた日からちょうど一年後のことである。ジャクソンの死からは三ヶ月しかたっていない。ほどなくこの詩はホイットニアの詩集『戦争の時代およびその他の詩』（1863）に収められた<sup>20</sup>。

『アトランティック・マンスリー』誌に発表されるや、「バーバラ・フリーチャー」は多くの新聞雑誌に転載された。たとえば、ボストンのメソジスト系雑誌『シオンズ・ヘラルド』は、その9月30日号に全文を掲載している<sup>21</sup>。興味ぶかいことに、南部の新聞もこの詩を転載した。ヴァージニア州リッチモンドの新聞『デイリー・リッチモンド・イグザミネー』は、「最近の北部の新聞」に載せられた「作りたてのバラッド」として「バーバラ・フリーチャー」を紹介した。その記事は、北部のご都合主義的な内容を批判すると同時に、詩というものが史書以上に力をもつことをみとめ、本作の影響を惧れる内容になっていた<sup>22</sup>。

ここで作者のホイットィアについて説明しよう<sup>23</sup>。ジョン・グリーンリーフ・ホイットィアは、アメリカ文学史上、19世紀前半から中盤にかけて活躍したいわゆる炉辺詩人に分類される詩人だ。じっさい、炉辺詩人の代表といえるヘンリー・ワズワース・ロングフェローと同じく1807年生まれであり、同じくニューイングランドの出身でもある。しかし、ホイットィアは、ロングフェローを含む他の炉辺詩人たちと大いに異なる。それは、名家出身の他の炉辺詩人とちがいで、ホイットィアが敬虔なクエイカー教徒の貧しい農家の出身であって、正規の初等教育もほとんど受けていなかったからだ。

ホイットィアは聖書やイギリスの詩人ジョン・バニヤン、ロバート・バーンズを通してひとりで詩作を学び、新聞に投稿することによって、のち過激な奴隷制廃止論者になるウィリアム・ロイド・ギャリソンの知己を得ていた。したがって初期の作品は、最初期のロマンティックな習作をへて、反奴隷制の詩が多くなる。たとえばマサチューセッツ州選出の連邦上院議員ダニエル・ウェブスターが南部と妥協して逃亡奴隷取締法に賛成すると、詩「悲しいかな」(1850)を書いて、ウェブスターを秋霜烈日に批判した<sup>24</sup>。

ホイットィアのもうひとつの詩群は、ニューイングランドの自然や生活を描いた作品である。これは南北戦争後に発達する地方色文学の先駆とっていい。たとえば、詩「雪ごもり」(1866)では、雪の降りつむ自然情景と、雪に閉ざされた家庭生活をあざやかに描いていた<sup>25</sup>。これはベストセラーになっただけでなく、現在でもホイットィアの代表作と考えられている。

晩年のホイットィアはロングフェローと並ぶ名声を得た。77歳の誕生日には『アトランティック・マンスリー』誌が晩餐会を主催し、13歳年長のウィリアム・カレン・ブライアントから28歳年下のマーク・トウェインにいたるまで、当代のアメリカ文学を代表する文人たちが集まった<sup>26</sup>。80歳の誕生日には、全米の政治家や判事たちが祝辞に署名した。その5年後、ホイットィアはニューハンプシャー州で息をひきとった。

### 「バーバラ・フリーチャー」を読む

作品の背景を示すため、前置きが長くなってしまった。本文の分析をはじめよう。

Up from the meadows rich with corn,	玉蜀黍ゆたかな草地から高々と
Clear in the cool September morn,	涼やかな九月の朝にくっきりと

The clustered spires of Frederick stand	フレデリックの群れなす尖塔がそそり立つ
Green-walled by the hills of Maryland.	緑なすメリーランドの丘に囲まれて。

弱強四歩格の二行連句である。二行連句は二行ずつ押韻するため、同韻の音がすぐ次の行末にくる。音の点でも構造の点でも単調になりやすい。そのため詩人の工夫が必要である。たとえば英雄二行連句を多用した新古典主義者たちは、対句や行間休止などを多用して単調になることをふせいだ。(しかしそのため技巧や機知を競う詩になりがちだった。)この詩の場合、弱強五歩格の英雄二行連句よりも、各行が二音節ずつ短いため、いっそう短い間隔で押韻されることになる。詩人の工夫がいっそう必要だ。

第一行にその工夫がみられる。冒頭第一脚を弱強脚ではなく強弱脚にしているからだ。そのため第一行の前半にはスピードの緩急が生まれた。その結果、第二脚の強音節である mead- にひと

きわ大きなストレスが置かれ、まるで meadows の広がりを表しているように聞こえる。しかも、後述するように、この詩のキーワードのひとつが up であって、冒頭の強弱脚はそのキーワードを強調することにも成功している。

第二行も同様だ。冒頭に強弱脚を配し、リズムの変化を狙っている。頭韻にも注意しよう。c の音が行をまたいで第一行の末尾から繰り返されていて、行ごとの単調さをふせぐ効果をもっている。この c の音は、冷涼な空気の清澄感を表しているといっていいただろう。頭韻といえば、第一行で強調された mead- の m の音も第二行末尾で繰り返され、行をまたいで響きあっている。

なお、上述のステュワートは言及していないが、玉蜀黍畑といえば、一週間後に 20 マイル西で繰り返されることになるアンティータムの戦いを思いおこさずにはいられない。というのは、その激戦の中心地が、収穫期を迎えた玉蜀黍畑であったからだ。この詩の冒頭の美しい平和な風景は、じつは一週間後の死闘のイメージと重ねられているのである。

第二連では、教会堂が多いことから敬虔な市民が多いことが予想され、そこは丘陵という城壁に囲まれた平和な街であることが示されている<sup>27</sup>。第二連第二行の冒頭 Green-walled も、弱強というより、むしろ強強と読むべきであって、リズムの変化を生みだしている。さらに、ここに至って初めてメリーランドという地名があらわれた。境界州としてクリティカルな存在であった地名だ。平和な風景を目の当たりにしてきた読者は、同時に緊張を感じはじめるのである。

Round about them orchards sweep, Apple- and peach-tree fruited deep,	街の回りにはぐるりと果物畑が広がる 林檎や桃の木が色こい実りをつけ
Fair as a garden of the Lord To the eyes of the famished rebel horde,	エデンの園のごとく清らかにみえた ひもじい賊軍の群れの目には
On that pleasant morn of the early fall When Lee marched over the mountain wall,—	あの初秋のすがすがしい朝 リーが壁なす山をこえ
Over the mountains winding down, Horse and foot, into Frederick town.	歩兵と騎兵をひきいて山々を縫い フレデリックの街に進軍した朝。

第三連でも詩人は各行の冒頭に工夫をこらす。Round や Horse では弱音節を欠損させ、Apple や Fair as、さらに Over では強弱脚にしている。To the eyes や On that pleas- では、弱弱強脚を利用した。たしかにこれらは技巧に富んだ工夫とはいえない。珍しくない素朴な手法である。しかし、その素朴な手法がこの詩の特徴となっている。また、第一連で遠景からはじまった叙景が次第にズームアップしていることにも注意しよう。いまや色鮮やかに実った果実さえ見えるのである。(deep は難解だが、ここでは「色濃く」を意味する副詞と解する。)

a garden of the Lord は、旧約聖書エゼキエル書 28 章 13 節に Eden the garden of God とあることを踏まえれば、エデンの園を不定冠詞に替えたものと考えられる。すなわちエデンのような園である。俗世から隔離された、一種の桃源郷だ。桃の花が一面に咲いている春ではないものの、たしかに桃の果実がみのっている。

この第三連から第六連はワン・センテンスになっているが、その内部の時制に着目したい。セ



ンテンスの主節は *orchards sweep* (果樹園が広がる) という現在形だ。つまり、永続的な風景である。しかし、そこに付随される従属節には *marched* (進軍した) という過去形が用いられている。現在の永続的な風景に、ある過去の事件が重ねられているのである。一文のなかで時制を変えることによって、読者をいっきに過去の世界へと引っばっていく。そのスピード感が効果的だ。

南軍を *rebel* (賊軍) と呼んでいることは大目にみよう。北部ではしばしば *rebel* という表現を使って南軍を表していた。ホイットィアのみ偏見ではない。それよりも、ここにいたって *Lee* という固有名詞が表れたことに注意したい。メリーランド州フレデリックという地名とリーという人名によって、一年前のメリーランド攻防戦という史実と結びつけられるからだ。しかも、すでにフレデリックの街が山という城壁に囲まれていた堅固な街であることを示していたので、その山を越えてリーが侵入したことになる。それは *over the mountain wall* という句と、*Over the mountains* という句を繰り返すことによって表されている。リーの軍隊は困難な山を容易に越えてきたのである。なお、*horse and foot* というのは、歩兵と騎兵で、すなわち、全軍で、という意味だが、ここでは、その進軍の音を象徴した表現ということができるだろう。軍靴と蹄鉄のひびきである。冒頭に示された清澄な空気クリアのなかで、その音はよくひびきわたったはずだ。

Forty flags with their silver stars,	銀星きらめく多くの旗が
Forty flags with their crimson bars,	深紅の縞あざやかな多くの旗が

Flapped in the morning wind: the sun	朝風の中でたなびいた：真昼の太陽が
Of noon looked down, and saw not one.	見下ろすと一棹も見えなかった。

第七連は問題だ。まず *Forty* という数が難しい。聖書では 40 という数字はしばしば 40 日など時間の長さを表すために使われている。たとえば、イエスは「四十日、四十夜、断食」した（マタイ伝 4:2）。しかし、ここではそのようなキリスト教的な意味よりも、むしろ「無数の」を意味すると解釈する<sup>28</sup>。もちろん *forty* と *flags* が頭韻を踏んでいることも、詩人が *forty* を使った大きな理由であることはいままでもない。

第七連にはもうひとつ問題がある。それは、この「無数の旗」には *stars* と *bars* とが描かれている、とされていることだ。ふつう *Stars and Bars* というのは、南部連合の国旗を指す。それは、赤白赤の太い縞が左右を横断し、左上には紺地に白い星が円形に並べられている旗である。けれども、朝のフレデリックの町に掲げられていた旗は明らかに星条旗だ。Stars and Stripes である。その星条旗が正午には見られなくなってしまった、とうたっているのである。したがって、*bars* という単語はきわめてミスリーディングといわざるをえない。*stars* と脚韻を合わせるためであったことは理解できるにしても、読者を戸惑わせる語法だ<sup>29</sup>。

ただし、想像をたくましくすれば、南部連合旗と星条旗は遠目には似ていて、しばしば混乱を招いていたため、その混乱をあえて詩人が利用した、という可能性も考えられる。メリーランド州は境界州だ。南部連合旗を掲げている家が多いことも十分ありえる。どちらの旗だろう、と読者が緊張して読みすすめることになるからだ。正午になってその旗が見えなくなったという記述により、星条旗だったことが明らかになってはじめて、その緊張が解ける、という企みである。そのような緊張の抑揚が意図されていた可能性もないわけではない。

ここでも韻律に対する詩人の工夫を紹介しておこう。第七連では、*Forty* も *flags with* も強弱脚

になっている<sup>30</sup>。その新しいリズムによって、韻律が単調になることを回避するだけでなく、その新しいリズムとfの頭韻とによって、旗があざやかに読者の眼前にうかぶ仕掛けになっている。さらに、-ing wind: という行間休止があることも指摘しなければならない。コロンの一種の終止符が行間に使われているのである。これは、新古典主義者たちも多用した手法だった。しかも、このコロンは逆接の役割を果たしている。そのような接続が行の中で行われているのである。きわめて強い印象を残す工夫だ。

## 老女と指揮官

Up rose old Barbara Frietchie then,                    そのとき老いたバーバラ・フリーチーが立ち上がった  
Bowed with her fourscore years and ten;                齢九十を重ねて腰の曲がった老婆が；

Bravest of all in Frederick town,                        フレデリックの街いちばんの勇ましい老婆が  
She took up the flag the men hauled down;                人々のおろした旗をかかげた；

In her attic window the staff she set,                    屋根裏の窓辺に旗竿を据え  
To show that one heart was loyal yet.                    ひとりの心がなお忠なりと示した。

いよいよバーバラ・フリーチーが登場する。Bowed with や Bravest のような強弱脚も使われているが、ここではむしろ弱強脚をあえて繰り返し、戦争詩らしいたくましい弱強のリズムを続けることによって、フリーチーの強健さを示しているといえるだろう。いや、弱強のリズムを強調することによって、フリーチーの俊敏さも表しているともいえる。さらに、up が二度使われていることにも注目すべきだ。その前後に Bowed や down という下向きの動きもはさんで、上下の動きがみられるが、もちろん上への動きが際立つようになっている。それは、彼女が星条旗をかかげたのが屋根裏の窓であるからだ。玄関先に掲げるのではなく、建物のもっとも高い窓に掲げたからだ。

Up the street came the rebel tread,                    賊軍の足音が道をやってきた  
Stonewall Jackson riding ahead.                        馬上のストーンウォール・ジャクソンを先頭に。

Under his slouched hat left and right                    縁だれ帽の下でジャクソンは左右を一瞥：  
He glanced: the old flag met his sight.                    目に入ったのはかつての国旗だった。

“Halt!” — the dust-brown ranks stood fast.                「止まれ」—茶色のほこりまみれの兵士たちがびたりと止まった。  
“Fire!” — out blazed the rifle-blast.                    「撃て」—ライフルの砲風が燃えあがった。

It shivered the window, pane and sash;                    それは窓を揺らした、ガラスと窓枠を；  
It rent the banner with seam and gash.                    それは旗を引き裂いた、ちぎってやぶって。

第六連で、「歩兵、騎兵ともにフレデリックの町」に侵攻したリー軍だったが、ここでは町の「通

り)にやってきた。軍隊の行進が間近に見えるのである。しかも、Stonewall も Jackson も riding も、元来強弱のリズムを内包した単語であって、そのような単語を並べることによって、ジャクソンの威風堂々たる姿が浮かびあがってくる。

第十三連は、Under や left and right が効いている。上へと動く老女とちがいで、指揮官は帽子の「下」で「左右」に目を配らせているのである。その視線はやがて屋根裏の窓に掲げられた星条旗を見だしたのだから、それはたしかに上を向いた。けれども、指揮官が最終的に上へ向けたものは銃口だった。まるで、銃という飛び道具を使わないかぎり、上方へと昇れないかのようだ。なお、the old flag という表現も興味ぶかい。(この old はもちろん「古びた」を意味するのではなく、「年来の」や「なつかしい」を意味する<sup>31</sup>。) ジャクソンにとって、一年前の開戦までは、合衆国の国旗である星条旗が the old flag だったからである。この表現は次に描かれるジャクソンの変化を予兆させる伏線になっている。

さらに第十四連と第十五連の対比も指摘しておきたい。第十四連では、二行とも冒頭の弱拍を省略し強拍からはじめることによって、ジャクソンのするどい号令の声表されている。それに対し、第十五連では、そのまま弱強脚を連続させることによって、スピード感を生み出している。すなわち、発砲によって、またたくまに窓ガラスがふるえ、旗がちぎれたことを伝えているのである。

Quick, as it fell, from the broken staff	旗が落ちるとバーバラ婦人は折れた棹から
Dame Barbara snatched the silken scarf;	すばやくシルクの布地をつかんだ；

She leaned far out on the window-sill,	窓敷居から身を乗り出し
And shook it forth with a royal will.	旗を外へ振った、意志堂々と。

"Shoot, if you must, this old gray head,	「撃たねばならぬのなら撃て、この老いた白髪頭を
But spare your country's flag," she said.	だがお前の祖国の旗を撃つなかれ」老女はいった。

いよいよ本作品のもっとも有名な部分だ。この詩は、フリーチャーのこの台詞によってもっともよく知られているといっている。

ここでも上下の動きが顕著である。撃たれた旗が棹から落ちる。しかしそれをフリーチャーがすばやくつかみあげるからである。その動きは老女とは思われない。まるで、何かが乗り移っているかのようだ。その力強さが、弱強脚の素朴な繰り返しによって表されている。さらに、その俊敏さが s の頭韻 (staff, snatched, silken, scarf, sill) に表れているといっている。

フリーチャーの有名な台詞についても付言しよう。この台詞が興味ぶかいのは、if you must という句が挿入されていることだ。これは「南軍の指揮官の義務として撃たなければならぬのなら」という意味である。すなわちフリーチャーは、ジャクソンは心の底から喜んで反乱軍を率いているのではない、ジャクソンの奥なる良心はまだ連邦に帰依している、と推定しているのである。ジャクソンには指揮官という重要な職務があるため、その良心を抑えこんでいるはずだと考えているのである。だからこそフリーチャーは星条旗を「お前の祖国の旗」と呼んだ。これは、この詩全体を考えるときに重要なことだと思われる。

A shade of sadness, a blush of shame,  
Over the face of the leader came;

悲哀の陰、羞恥の赤みが  
指揮官の顔に浮かんだ；

The nobler nature within him stirred  
To life at that woman's deed and word:

内なる高貴な天性が息を吹きかえした  
あの女性の行為と言葉によって；

"Who touches a hair of yon gray head  
Dies like a dog! March on!" he said.

「あの白髪頭の髪一本にもふれる者は  
みじめな死をとげる！ 進め！」指揮官はいった。

フリーチャーが想定したとおり、ジャクソンの胸の内には「高貴な天性」という良心があった。無意識のうちに抑えこんでいた良心がいま息を吹きかえしたのである。そのときのジャクソンの当惑と動揺が sh (*shade, blush, shame*) や s (*sadness, face, stirred*) の音に繰り返されている。冷徹であるべき部隊の指揮官として、見せてはならぬ表情をうかべてしまったのである。

「みじめな死をとげる」というジャクソンの号令は現在形で書かれているものの、話者の意志が込められていると考えるべきだろう。すなわち、そういう輩は私が処刑するぞ、というジャクソンの意志である。いいかえれば、ジャクソンはそのような厳しい命令を発することによって、指揮官としての威厳を保つと同時に、自分の良心が悟られぬようにしたことになる。そして、「犬死」という言葉が、八ヶ月後、暗闇の混乱のなかで友軍の誤射によって重傷を負い死に至る、ジャクソン自身の運命を示唆していることはいうまでもない<sup>32</sup>。

All day long through Frederick street  
Sounded the tread of marching feet:

一日中、フレデリックの道には  
ひびいた、進軍の足音が；

All day long that free flag tost  
Over the heads of the rebel host.

一日中、あの自由の旗は  
ひるがえった、賊軍の頭上に。

Ever its torn folds rose and fell  
On the loyal winds that loved it well;

旗のちぎれた襷はたえず上下した  
旗を愛する忠なる風を受け；

And through the hill-gaps sunset light  
Shone over it with a warm good-night.

やまあい  
山間から夕陽が旗を照らした  
暖かくお休みなさいと。

Barbara Frietchie's work is o'er,  
And the Rebel rides on his raids no more.

バーバラ・フリーチャーの務めは終わった  
もはや賊軍が馬を駆って侵略してくることはない。

フリーチャーとジャクソンの対立は終わったが、大きな部隊が町を通過するには時間がかかる。その時間の経過をうたっている部分だ。All day long という句の繰り返しそのものが、時間の長さを象徴している。

まず、地上を水平に移動する軍隊と、その頭上で立体交差しながらひるがえっている星条旗との対比があざやかだ。水平に移動する軍隊の方は、足音という聴覚によって示される。つまり、

それを見ている者がいない。視線が不在なのである。しかるに、上下する旗は視覚によって示されている。つまり、それを見ている視線が存在しているのである。その視線が「風」であり「夕陽」だ。

一日の終わりを告げる夕陽が、暖かくお休みという挨拶を送るのは、もちろん、フリーチーの永眠を示唆している。読者は初めて無名の老女フリーチーの死に気づくのである。形式はまったく異なるが、この部分は哀歌のように聞こえるといっている。現在形の情景描写からはじまり、過去形で語られる事件の叙述をへて、現在に通じる状況をふたたび現在形でうたっていることにも注意しよう。

Honor to her! and let a tear Fall, for her sake, on Stonewall's bier.	老女に名誉あれ！ そして彼女を思って 涙を落とせ、ストーンウォールの棺へ。
Over Barbara Fritchie's grave Flag of Freedom and Union, wave!	バーバラ・フリーチーの墓の上で 自由と連邦の旗よ、ひらめけ！
Peace and order and beauty draw Round thy symbol of light and law;	平和と秩序と美を引き寄せよ 汝の光と法の象徴の回りに；
And ever the stars above look down On thy stars below in Frederick town!	たえず天上の星に見守らせよ フレデリックの地にある汝の星を

詩の最後は教訓でまとめられている。19世紀にはよくみられた形式だ。けれども、この教訓も巧みに示されている。まず、フリーチーの果たした役割をたたえるだけでなく、戦中でありながら、敵将ジャクソンの死も悼んでいる。それだけではない。for her sake という句から分かるように、詩人は、フリーチーが生きていれば、ジャクソンを悼んだはずだと考えているのである。さらに、落ちる涙と墓上の旗という対比も、上下のベクトルを表している。

当初の呼びかけは読者に対する呼びかけだが、次の連では、星条旗に呼びかけている。星条旗に対する命令文になっているのである。そこではフリーチーが守った星条旗が擬人化され神格化されているといっている。最終連も、構文的にわかりにくいだが、使役動詞 let を冒頭に補うことによって、同じく星条旗に対する命令文と考えることができるだろう。天上の星をしてフリーチーの星条旗の星を見守らせよ、としめくくったのである。

### むすびにかえて

バーバラ・フリーチーは英雄になった。終戦翌年には、写真に基づく肖像画が「フレデリックのヒロイン」というタイトルで当時の代表的雑誌『ハーバース・ウィークリー』誌に掲載された<sup>33</sup>。終戦二年後に『南北戦争における女性の働き——ヒロイズムと愛国主義そして忍耐の記録』がまとめられたときには、屋根裏の窓から体を乗り出して旗を振るフリーチーの姿が、それを当惑して見上げるジャクソンの姿とともにフルページ大のイラストに描かれた。この構図はのちに数多く描かれることになるが、おそらく最初のイラストレーションだと思われる<sup>34</sup>。このようにフリーチーは、北部の精神を代表する銃後の女性として顕彰された。おそれを知らぬ勇猛な女性

として「記録」された。

けれども、テキストをていねいに読むことによって明らかになった点は次の三点である。

第一に、ホイットニアは弱強四歩格の二行連句がもつ長所と短所をよく理解し、それを有効利用している。長所は脚韻の間がきわめて近いことによって生まれる反復感だ。つまり、弱強のリズムの反復が、脚韻の反復によって増強されるのである。その結果、強く耳に残る鮮やかな韻律が生じる。それは、戦争詩にふさわしい雄勁な韻律だ。他方、この形式は長所と裏腹の短所も持つ。すなわち、反復感によって単調になりやすいのである。ホイットニアはその短所も十分認識している。そのため、多くの行の冒頭にさまざまな工夫を凝らした。しばしばリズムに変化を加えることによって、一本調子の律動を避けているのである。

この詩の第二の特徴は、up という副詞をはじめ、垂直方向の動きが強調されていることである。街の回りを囲んだ山々、街に群れなす尖塔、屋根裏にのぼるフリーチャー、そして旗を見上げる南軍などだ。これらは、メリーランドの果たした役割やフリーチャーの勇敢な行為がいかに気高いものであったことを象徴しているといっていだろう。さらに最終的にはフリーチャーが天国に上ったことをも表象している。

他方、南軍は地上を水平に移動する。大軍のため丸一日かかって街を通過するのだが、それはいわば地を這って進む行為だ。天に昇ることがない。フレデリックの上下にのびやかな風景やフリーチャーの垂直な動きとはきわめて対照的である。この二つのベクトルの対比が、本作品の大きなダイナミズムを作り出している。

この詩の第三の特徴は、この詩が戦時中に書かれた愛国的な戦争詩であるにもかかわらず、同時に、戦争終結後の平和な世界をもうたっていることである。たしかにこの詩は北部の大義を是として南部を賊軍とみなしている。勇敢な老女フリーチャーは挑発的であり、好戦的ですからある。けれども、老女と指揮官は敵同士でありながら、同じアメリカ人として心を通わせていることを見逃してはならない。そこには和解の兆しがみえるのである。

それだけではない。そこには戦争の後の鎮魂の必要性も示唆されている。北部の老女も南部の指揮官も同じ人間として同じ死を迎えている。死には北も南もない。旗を巡って対立した老女と指揮官は、死によってひとつになった。そのように、北と南は鎮魂と哀悼によってふたたびひとつになることができる。この作品末尾の哀歌的部分はそのようなアメリカの未来をうたっているといえるだろう。

すでに述べたように、この詩が発表されたのは1863年9月だ。南北戦争最大の総力戦ともいえるべきゲティスバーグの戦い（1863年7月）はすでに終えていたものの、まだ戦争はあと一年半つづく。しかし、詩人はすでにその戦後を見すえている。死闘を演じた南北が和解することは可能であり、そのためには鎮魂や哀悼が必要であると示していたのである。

すなわち、この詩は戦中に書かれたものの、戦意を鼓舞するような戦争詩とはちがう。それはもちろん反戦の歌でもない。そうではなく、銃後の老女や敵将をたたえながら、次の世に来るべき平和を祈った歌になっている。愛国心をたたえた戦争詩でありながら、同時に、平和の世を願う詩になっている。その一見矛盾した両面性が、この詩最大の魅力といえるだろう。

この詩がそのように読まれてきたようには思われぬ。体を張って連邦の回復という北部の大義を唱えた老女の詩とみなされてきたのである。「……撃て、この老いた白髪頭を／だがお前の祖国の旗を撃つなかれ」という句に代表されるイデオロギー的な詩にみなされがちだ。たしかにスチュワートがいうとおり、そこには、南軍優勢で始まったのち、北部が逆転し北部の勝利に近

づいている、1863年当時の戦況の推移も描かれている。しかし、この詩の最終部分で明らかになるように、詩人は早くも戦時中から戦後も見すえているのである。南北両方の死者を悼みながら、ふたたびひとつの合衆国として南北が和解調和する、そのような戦後を見すえているのである。それは平和主義を信奉するクエーカー教徒の詩人ホイットニアにこそふさわしい見すえ方だ。

## 注

- 1 Albert J. von Frank, *Whittier: A Comprehensive Annotated Bibliography* (New York: Garland Publishing, Inc., 1976), p. 188.
- 2 Dorothy M. Quynn and William R. Quynn, "Barbara Frietschie [sic]," *Maryland Historical Magazine* 37 (1942): 227-54, 400-403; and Ralph Stewart, "'Barbara Frietchie' and the Civil War," *ANQ: A Quarterly Journal of Short Articles, Notes, and Reviews* 16: 2 (2003): 32-36. なお本稿では前者の論文は、同年に単行本化された版を使う。Dorothy M. Quynn and William R. Quynn, *Barbara Frietschie [sic]* (Baltimore: Maryland Historical Society, 1942). ここでフリーチーの綴りについて注記したい。多様な綴りが使われてきたからである。ホイットニアが作品に使った綴りは Frietchie だった。しかし現代では Fritchie と綴られることが多い。一方、バーバラ・フリーチーと血縁関係にあるクイン姉弟は、Frietschie という表記を一貫して使っている。元々のドイツ語表記は、おそらく Frietsche だった。Ibid., p. 34.
- 3 Robert McCartney, "The Illegitimate Fame of a Legendary Civil War 'Heroine,'" *The Washington Post* (16 September 2012): C1; and Quynn and Quynn, pp. 25-28.
- 4 前掲 Currier.
- 5 Michael Winship, ed., "John Greenleaf Whittier," in vol. 9 of *Bibliography of American Literature* (New Haven: Yale University Press, 1991), p. 104.
- 6 前掲 Von Frank.
- 7 前掲 Woodwell.
- 8 Quynn and Quynn, p. 19.
- 9 サウス・カロライナ州、ミシシッピ州、フロリダ州、アラバマ州、ジョージア州、ルイジアナ州の計六州が連邦から脱退（それぞれ 1860年12月20日、1861年1月9日、1月10日、1月11日、1月18日、1月26日）したのちに州へ昇格したカンザス州（1861年1月29日）を含む。また、準州・領には、インディアン領も数える。
- 10 のちウェストヴァージニア州がヴァージニアから分離して連邦に加わったため、北部は二十四州になる（1863年6月20日）。
- 11 ヴァージニア州から分離したウェストヴァージニア州も境界州に含めることがあるが、本稿では除外する。その理由は、まず、ウェストヴァージニア州は自由州として設立されたこと、さらに、ヴァージニアからの独立および連邦への加盟が戦中の 1863年だったことである。
- 12 William E. Gienapp, "Abraham Lincoln and the Border States," *Journal of the Abraham Lincoln Association* 13 (1992): 14.
- 13 Margaret E. Wagner, et al., ed., *The Library of Congress Civil War Desk Reference* (New York: Simon and Schuster, 2002), p. 72.
- 14 James M. McPherson, *Battle Cry of Freedom: The Civil War Era* (New York: Oxford University Press, 1988), p. 284.
- 15 連合国の軍旗は国旗でこそなかったが、国旗よりもむしろ南部連合の中心的シンボルとなった。See John M. Coski, *The Confederate Battle Flag: America's Most Embattled Emblem* (Cambridge: The Belknap Press of Harvard University Press, 2005), pp. 6-7.
- 16 James M. McPherson, *Crossroads of Freedom: Antietam* (New York: Oxford University Press, 2002), p. 3.
- 17 本稿では詳述しないが、ホイットニアはこの「事件」を 1863年7月、ワシントンの女性作家エマ・D・E・N・サウスワースから聞いた。サウスワースは、事件当時フレデリックにいた、当事者の親戚から聞いたという。サウスワースもホイットニアもこの事件の信憑性を疑ってはいなかった。Roland H. Woodwell, *John Greenleaf Whittier: A Biography* (Haverhill, Mass.: The Trustees of the John Greenleaf Whittier Homestead, 1985), p. 320; and

- Whittier to Emma Dorothy Eliza Nevitte Southworth, 8 September 1863, *The Letters of John Greenleaf Whittier*, ed. John B. Pickard (Cambridge: The Belknap Press of Harvard University Press, 1975), 3: 46–47.
- 18 John Greenleaf Whittier, “Barbara Frietchie,” in *The Poetical Works of Whittier*, ed., Horace E. Scudder (1894; Boston: Houghton Mifflin Company, 1975), pp. 342–43. 以下、ホイットティアの詩を引用するときには、このいわゆるケンブリッジ版を使う。
- 19 John Greenleaf Whittier, “Barbara Frietchie,” *The Atlantic Monthly* 12 (October, 1863): 495–97.
- 20 なお、この詩集の刊記には1864年の出版と明記されているが、実際に刊行されたのは1863年11月のことである。See Thomas Franklin Currier, *A Bibliography of John Greenleaf Whittier* (Cambridge: Harvard University Press, 1937), pp. 93–94. また、この詩集のタイトルからは、「戦争の時代」という詩が収められているように聞こえるが、そのような詩はない。「戦争の時代」というのは、「バーバラ・フリーチー」を含む13の詩編をまとめた章のタイトルである。
- 21 John G. Whittier, “Barbara Frietchie,” *Zion’s Herald and Wesleyan Journal* (30 September 1863): 1.
- 22 *Daily Richmond Examiner* (17 October 1863): 2.
- 23 以下の伝記は、ホイットティアの標準的伝記というべき、前掲 Woodwell を利用した。
- 24 John Greenleaf Whittier, “Ichabod,” in *The Poetical Works of Whittier*, ed., Horace E. Scudder (1894; Boston: Houghton Mifflin Company, 1975), pp. 186–87.
- 25 John Greenleaf Whittier, “Snow-Bound,” in *The Poetical Works of Whittier*, ed., Horace E. Scudder (1894; Boston: Houghton Mifflin Company, 1975), pp. 398–406.
- 26 ただしアメリカ文学研究では、この晩餐会はもっぱらマーク・トウェインのユーモラスな祝辞によって知られている。
- 27 クイン姉弟も指摘するとおり、じつは、このフレデリックの風景には出典があった。詩人オリヴァー・ウェンデル・ホームズが、アンティータムの戦いで負傷した息子（のちの最高裁判事オリヴァー・ウェンデル・ホームズ・Jr.）を探してメリーランドを訪れたときの体験記である。それは、『アトランティック・マンスリー』誌の1862年12月号に掲載された。たしかにそこには、「群れなす尖塔」や「メリーランドの丘」という表現がみえる。Quynn and Quynn, pp. 20–21; and Oliver Wendell Holmes, “My Hunt after the Captain,” *The Atlantic Monthly* 10 (December 1862): 751.
- 28 Ad de Vries, *Dictionary of Symbols and Imagery*, revised ed. (Amsterdam: North-Holland Publishing Company, 1976), p. 200.
- 29 この問題はクイン姉弟も指摘している。Quynn and Quynn, p. 20.
- 30 ただし、For-の前に弱音節が欠損しているとみなし、-ty flags で弱強脚、with their sil- で弱弱強脚になっているとスキャンすることも可能。
- 31 アメリカ合衆国の国旗には、「星条旗」のほかに「オールド・グローリー」という呼び方もある。
- 32 なお、のち英雄として伝説化したストーンウォール・ジャクソンについては、新しいヘットルの研究がある。Wallace Hettle, *Inventing Stonewall Jackson* (Baton Rouge: Louisiana State University Press, 2011).
- 33 “The Heroine of Frederick,” *Harper’s Weekly* (28 July 1866): 477.
- 34 L. P. Brockett and Mary C. Vaughan, *Woman’s Work in the Civil War: A Record of Heroism, Patriotism and Patience* (Philadelphia: Zeigler, McCurdy and Company, 1867), vignette title.